

臨床雑誌 内科

2024
Vol.133 No.1

1

南江堂

[特集]

総合内科医としての インプレッシブ・ ケース集

総合内科医はいるのか?

企画：國松淳和

[連載]

新連載 ほんとに意味あるの？ その感染対策・感染症治療
内科医が精神科のくすりを処方する。
イメージで捉える呼吸器疾患
特別読切 Focus On「肺移植の適応と実際」

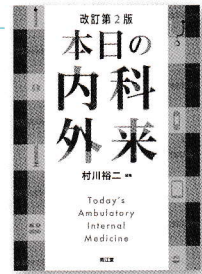


本日の内科外来(改訂第2版)

編集：村川裕二

A5判 400頁 南江堂 2023年4月
定価 5,060円(本体 4,600円+税10%)

Nankodo.co.jp



親切で物知りな、心強い先輩医師のような本

評者 | 稲葉俊郎(軽井沢病院 院長・総合診療科医長)

外来診療をしていると、ちょっとしたことで困ることが多い。近くに相談しやすい専門医がいれば電話して聞けばよいかもしれないが、そうした幸運な状況にいる医師は少ないだろう。専門書で調べれば専門的な見解に触れられるが、知りたい情報に到達するまでに時間がかかる。手早く知りたいとなるとインターネットで検索することになるが、それで得られるような情報は、患者さんも事前を知ることで済む情報ばかりだ。情報は「誰が書いているか」という情報源こそが重要だが、その点インターネットの情報はいつでも書き換えられることもあり、根拠としては心細い。今後、人工知能が進歩すると、専門医に聞くこと、専門書で調べること、気軽に検索して調べること、の間をつなぐものが生まれるだろうが、本稿を執筆している2023年の時点ではそのような便利なものは存在しない。やはり、困ったときは原点に戻って、アナログな本に頼るのが一番だ。

本書は、外来診療で出会うちょっとした困りごとに対処するための知恵とアドバイスに満ちている。検査値の異常をみてどのように考えるか、患者さんの訴えを聞いてどのように考えるか。それぞれのトピックに対して、数頁で知りたい情報へ到達できるように工夫されている。通常の外来診療で慣習的に出す処方を見直しまで、本書の親切心は細部にまで至っている。

たとえば、「労作時の息切れ」の訴えがあったとき、まず診察室で「聞く」「診る」べきポイントが記載され、「検査する」の項ではどのような検査をして、どこをチェックすればよいのか、といった実践的なアドバイスがある。「念を入れるなら」として、理想的な検査まで書かれているので参考に

なる。「治療する」の項には、状況に応じた治療法・治療薬が記載されている。具体的なイメージをもって読み進められるように、よく遭遇しそうな典型的な症例が年齢や病歴とともに紹介され、どのような思考プロセスで考えていくべきか、臨場感をもって学べる。処方例としても、点滴であればどの程度のスピードで投与を始めるべきかといった点について、目安となる無難で安全な使い方が紹介されているので、使ったことのない薬剤を使用する場合でも非常に安心である。また、「患者さんを安心させるコツ・ポイント」が記載されている項目もあり、おまけのようでありながら、ここが本書で一番感動した点である。外来診療で重要なのは相手との信頼関係である。もし、結果的にこちらの診断が不正確であっても、短い外来診療のなかでしっかりと患者さんとの信頼関係が築けてさえいれば、トラブルにもならず軌道修正ができる。相手の不安を取り除くことも含め、どのような説明をするのがよいのかを考えて、相手が理解しやすい言葉を使うことが重要であり、かゆいところにも手が届く書籍になっている。「このように説明すればよいのか」と学ぶことが多く、私自身も外来診療の実践で真似をしている。

本書は、経験の浅い医師にとってはもちろんだが、何十年も外来をやっている経験豊富な医師であっても学ぶことが多いだろう。自信のない分野や経験の浅い分野だけではなく、自身の診療を見直すためにも、私は外来診療の隙間時間に読み物として読むようにしている。まるで、親切で物知りな、心強い先輩医師たちと雑談をしているような時間になるからだ。ぜひ外来診察室に置いてほしい一冊である。